

佳作

心の中心きんめい

長野県 信州大学教育学部附属長野中学校二年 中田 奏音

今から二年前、私はまだ小学生だった。二年も経つと、小学校の頃の記憶は薄らとしか残っていない。でもあの日のことはずっと覚えていて。きっとこれからも忘れない。

「あの日」というのは、ちょっと変わった私の卒業式のことだ。特別な日だが、別に私にとって楽しみなことではなかった。「ずっと立ちっぱなしで話を聞くのは嫌だな」と、少し幼稚な低学年の子みたいな気持ちがあった。それに、今まで一緒にいた友達との別れの日なんて来なくてもいいと思った。そして私には楽しみだと思えない理由がもう一つあった。それは、体育館の建て替え工事をしていて、卒業式をせまい多目的室でやることになったことだ。普通だったらステージに私たちが立ち、目の前に在校生がいるけれど、多目的室ではそれもできなかつ

た。そのため、体育館なら歌えるはずの歌も歌えなかった。そして在校生は教室で卒業式の映像を見ているだけ。正直、普通に卒業式をしたいという気持ちがある。でも今は、世界中のどこにもない一回だけの卒業式が私の中学校生活を変えてくれた大切な出来事となっている。

卒業式の朝、着慣れない制服を着て、母と学校へ行った。なんだか妙に胸騒ぎがした。いつも通りの校舎を歩いていつも通りの友達と話しているはずなのになぜか緊張した。そんな中、私たちの卒業式が始まった。せまい中で、長々とお話を聞いて、卒業証書もらい、卒業生で歌を歌う。私の思う通りの展開だった。でも、その後はちがった。卒業式の最後、私たちは列になってろう下を歩いた。ろう下の両端には在校生がずらりと並んでいた。在校生は、「心の中にきらめいて」という歌を歌っていた。その曲はよく知る曲だったけれど、私はその時、初めて聴いた時よりも感動した。まだ泣いていいと、心の中では思っていないのに、目からは涙があふれ出してきた。あわてて止めようとしたけれど、もうおそかった。涙のせいか、目の前の景色はぼんやりとしていて温かく感じられた。そして、今までの思い

出が走馬灯のように流れていった。

「あの時の思い出は今確かに巡りくる。笑顔で語りあった時のように心の中に輝いていつまでも忘れられない」。その曲の歌詞の一部だ。

その時の言葉も声も、ずっと覚えている。在校生から伝わってくる様々な思いが、歌を通してわかってきたのだ。そんな合唱を作りたい。私はそう思った。二年後の今日も、その思いは変わらない。卒業式をきっかけに、中学では合唱部に入って歌を歌っている。今は夏のコンクールに向けて日々練習を重ねている。どんな歌を歌う時でも私はそこに思いをこめることを忘れない。それが私の一番大切なことであり、忘れたくないことだから。